

エンバク新品種「サビツヨシ」(系統名・AS-6)の 特性と栽培の手引き



雪印種苗(株) 宮崎試験農場

山 渕 泰

1 はじめに

エンバク「ハヤテ」はトウモロコシの収穫後に短期間で生育し、年内に収穫が可能なことから、手軽に栽培できる作物として愛用されています。

《トウモロコシ+エンバク》の作付体系は冬期間に堆肥散布ができ、早期に圃場準備が完了し、トウモロコシの早播きができることがメリットとなり、関東以西を中心に定着いたしました。一方、西南暖地では、《トウモロコシ+イタリアンライグラス》の作付体系に「ハヤテ」を加え、イタリアンライグラスとの混播栽培が行われています。

今回、紹介する「サビツヨシ」は夏播エンバクに多発する冠さび病の耐病性を格段にアップさせた品種です。基本的には「ハヤテ」と同様な栽培ができますが、特に冠さび病の発生で栽培をやめていた地域にも以前のおり極早生エンバクを作付することができるようになりました。

2 「サビツヨシ」の品種特性

1) 耐病性

エンバク共通の重要病害の一つに冠さび病があります。冠さび病はエンバクの茎葉に赤橙色の粉が付着する病害で、植物体を枯死にいたらしめ、激発すると大幅な減収をもたらします。冠さび病の発生は、夏播き年内どりで10月中旬以降の出穂前後から始まり、また、秋播き翌春どりで5月上旬ごろから始まります。被害程度はその年の気候によって異なり、昨年のような干ばつ条件では大発生するようです。

「サビツヨシ」は、冠さび病について、重点的に調査し、かつ、その強度な抵抗性を付与した品種

表1 冠さび病抵抗性(夏播き年内どり)

場 所 (年次)	宮試 (平3)	宮試 (平4)	山口農試 (平3)	千研 (平3)	平均 評点
サビツヨシ	9.0	9.0	8.8	9.0	9.0
アキワセ	8.3	3.3	3.7	6.0	5.3
アーリークォーン	7.5	4.0	未調査	7.8	6.4
エンダックス	6.8	4.0	未調査	7.0	5.9
スプリンター	6.5	6.3	未調査	7.8	6.9
平均	7.6	5.3	6.3	7.5	6.7

注) 評点: 9(極強)~1(極弱)

山口農試のデータについても、上記の評点に換算した。

であり、本病害に罹病することはなく、安心して栽培と取り組むことができます(表1参照)。冠さび病を回避するために、播種時期を遅らせる場合が見受けられますが、「サビツヨシ」を利用すればそういった栽培法をとる必要がありません。

2) 耐倒伏性

平成4年秋、西南暖地を中心に全国で「サビツヨシ」の試作栽培を行なった結果、耐倒伏性にも優れることから、多くの農家から好評が得られました。当農場においても、密植ストレスを与えた

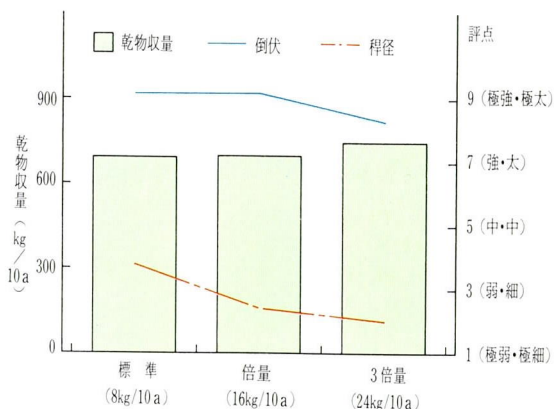


図1 サビツヨシの播種量と倒伏の関係

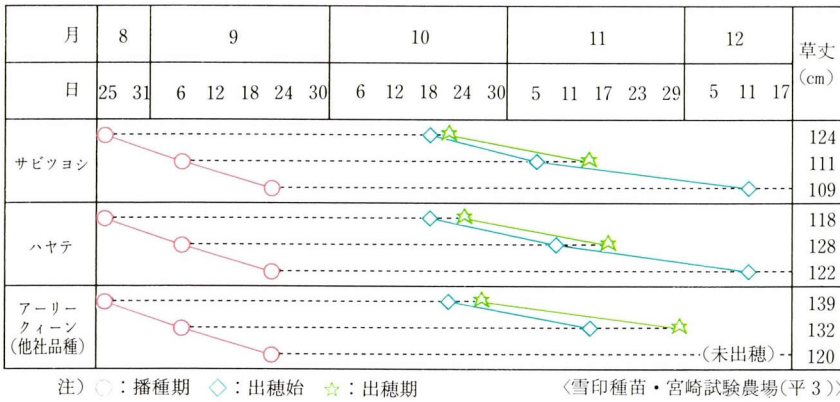


図2 播種期と出穂期の関係

耐倒伏性の検定試験を行なったところ、標準の3倍の播種量でも倒れないとの結果が得られ、耐倒伏性が極強であることが明らかになりました(図1参照)。

3) 早晩性

早晩性は極早生で、夏播き年内どりの栽培に適

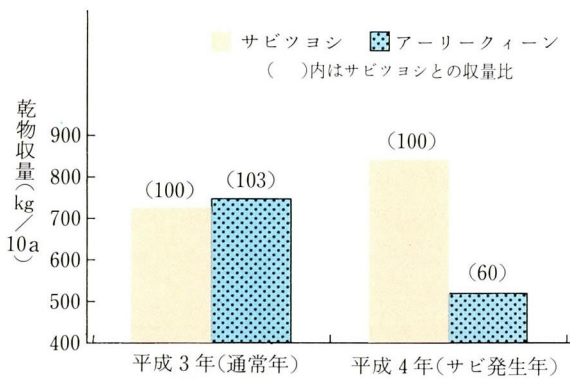


図3 サビツヨシの安定した収量性

<雪印種苗・宮崎試験農場>



写真1 冠さび病に強いサビツヨシは収量が安定している(左・アーリークイーン, 右・サビツヨシ)

する品種です。

当場で細かく播種期別の出穂期を調査したところでは、8月下旬～9月上旬の播種では従来の極早生エンバクのハヤテよりも3～4日早く出穂し、9月中旬～9月下旬ではハヤテと同時に出穂します(図2参照)。また、10月以降播きの秋播き翌春どりでは、ハヤテより

5日程度遅く出穂し、春播き初夏どりでは2日程度遅く出穂するようです。

4) 収量性

「サビツヨシ」は直立型で短稈・細茎・広葉な独特な草姿をした品種です。

冠さび病が発生しない場合は収量的には他品種と大差ありませんが、図3・写真1に示すように、冠さび病の発生した場合には罹病品種の収量が激減しているのに比べ、耐病性に優れる「サビツヨシ」の収量が極めて高くなっているのが分かります。すなわち、「サビツヨシ」は倒伏・病害には最も強いことから、常に安定した収量が確保できる品種といえるのです。

3 「サビツヨシ」の栽培基準

1) 播種期

冠さび病の心配がなくなったため、早播きすることができるようになりました。すなわち、トウモロコシの収穫が終わったら即座にエンバクの作付に入れるわけです。この場合の簡易的な播種方法を図4に示しましたので参考にして下さい。

西南暖地では8月下旬～9月中旬、関東地方では8月中旬～9月上旬が播種適期です。代表的な作付体系を図5に示しました。

秋播き翌春どりでは、一般的なムギの作付時期と同じで、西南暖地では11月中旬～12月上旬、関東地方では10月下旬～11月中旬が播種適期です。また、春播き初夏どりでは梅雨前までの収穫が基本で、西南暖地では3月上旬～3月下旬、関東地方では3月中旬～4月上旬が播種適期です。

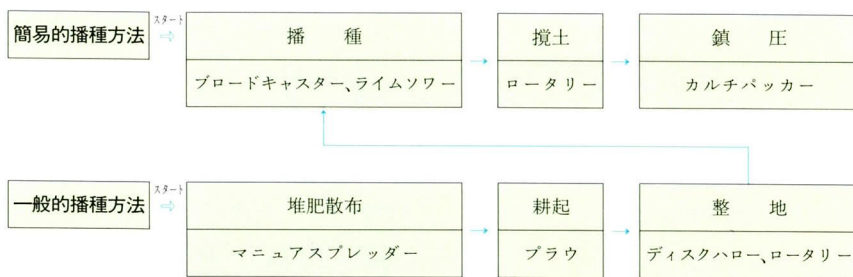


図4 「サビツヨシ」の簡易的な播種方法

に混播の播種適期は9月上旬～9月下旬といわれています。

播種量はサビツヨシ5 kg/10 a, イタリアンライグラス(マンモスB) 3 kg/10 aを標準とします。

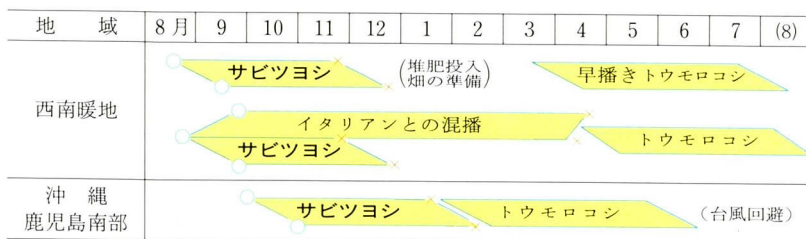


図5 サビツヨシの作付体系例

4 「サビツヨシ」と「ハヤテ」の使い分けについて

表2に年内出穂を安定的に確保する播種適期を示しました。「サビツヨシ」は冠さび病

抵抗性ですから早播きに適します。また、遅く播くほど「ハヤテ」の出穂が「サビツヨシ」より早くなるので、遅播きでは「ハヤテ」の方がよいでしょう。

また、播種時期にかかわらず、冠さび病の発生が多い地域には、「サビツヨシ」がよいでしょう。

5 おわりに

以上、エンバク新品種「サビツヨシ」の品種特性と栽培の手引きについて述べましたが、「サビツヨシ」の販売は平成6年夏からの開始となり、今年は少量の種子を試作させて頂くことになっています。

自給飼料を栽培するに当たって、第一に考えなければならないことは安定生産です。天候あるいは各種条件に恵まれ多収となる品種よりも、限られた生育期間の中で、致命的な病害に対する抵抗性を持ち、不良条件の中でも一定レベル以上の収量を確保できる品種こそが畜産経営に貢献できるものと思います。今回、ご紹介いたしました「サビツヨシ」はまさに、そのような判断基準から見て安定・優良品種と考えられます。

試作をご希望の方は、最寄りの営業所までお問い合わせ下さい。

2) 播種量

夏播き年内どりでは8～10 kg/10 a, 秋播き翌春どりでは6～8 kg/10 a, 春播き初夏どりでは8～10 kg/10 aが標準の播種量です。

3) 刈取り適期

乾草・ロールペール利用では、繊維の消化性が良い止葉期～出穂期が、サイレージ利用では、水分が75%前後に低下してくる乳熟期(出穂後約2週間目)が刈取り適期になります。

4) イタリアンライグラスとの混播栽培

(西南暖地中心)

「サビツヨシ」は直立型の草姿をしているため、光の透過が良く、イタリアンライグラスとの混播栽培に適します(標題写真)。

「サビツヨシ」は冠さび病抵抗性に優れるので早播きができますが、イタリアンライグラスは早播きすると、いもち病が発生することがあり、一般

表2 年内出穂を安定的に確保する播種適期

播種期		サビツヨシ	ハヤテ	アーリークイーン
西南暖地	関東			
8月25日	8月20日	◎	△	△
9月5日	8月25日	◎	◎	○
9月15日	9月5日	○	◎	×
9月25日	9月10日	△	△	×

注) ◎:最適, ○:適, △:可, ×:不適